

## 様式C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年 2月13日現在

研究種目： 基盤研究（C）

研究期間： 2006～2008

課題番号： 18520017

研究課題名（和文） 証聖者マクシモスにおける人間と宇宙的神化

研究課題名（英文） A Study on Human-being and Deification in the Philosophy of St. Maximus the Confessor

研究代表者

谷 隆一郎（TANI RYUICHIRO）

九州大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：60128048

研究成果の概要：

上記のテーマについて、この数年間で託した種々の論文をもとにして、それらを吟味し直し敷衍して一書にまとめ、今年2月に『人間と宇宙的神化—証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって—』（知泉書館）という題で出版した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	480,000	3,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：東方・ギリシア教父，存在，善，人間，徳（アレテー），神化

### 1. 研究開始当初の背景

東方・ギリシア教父，ビザンティンの思想潮流は，西洋の思想史において大きな源泉となる重要なものである。我が国においても「カッパドキアの3つの光」たる教父たち，とくにニュッサのグレゴリオスやバシレイオス（4世紀），グレ

ゴリオス・パラマス（14世紀），あるいは砂漠の師父に端を発する修道制の展開などについては，近年，さまざまな翻訳と研究が為されてきた。筆者自身，そうした動向に参加し，2000年には『東方教父における超越と自己—ニュッサのグレ

ゴリオスを中心として一』(創文社)を上梓した。しかし、2世紀から8世紀中葉に及ぶ東方教父の伝統の集大成者と目される証聖者マクシモス(580頃—662)については、従来我が国ではまとまった研究が見当たらなかった。そこで筆者は、ここ7、8年この教父に注目して原典の吟味・解釈に努め、さまざまな論考を記してきたが、今回の科研費を申請したときは、それらの研究を進めるとともに、一まとめにして一書に仕上げるべき時期にさしかかっていた。

## 2. 研究の目的

それゆえ本研究は、証聖者マクシモスという代表的な教父について、原典の精確な解釈の上に、中心的なテーマについてさらに論考を記し、それらを一書にまとめることを目的とした。その成果は、2009年2月、『人間と宇宙的神化—証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって—』(知泉書店)に結実したが、そこに至る研究の方法と内実とは、以下に示す通りである。

## 3. 研究の方法

マクシモスの愛智(=哲学)の探究は、学と修道とが渾然と一体化したものであり、人間、自然、そして神についての洞察に満ちている。それゆえこの研究は、まずは古の代表的な教父の原典に即して、精確に吟味し解釈してゆくことを主眼とする。が、それとともに、この研究は、人間と自然・本性の根源的な意味を歴史のかつ本質的に問うものであるので、現代に生きるわれわれにとって学と生との道行きの或る範型ないし指針を見出してゆく営みともなろう。そしてそれは、現代の精神状況に対して、またいわゆる応用倫理的な諸問題に対しても、それらを問題の根底に遡って問い抜くための礎となることを期している。

こうした探究の主たる対象であり素材となる原典は、『難問集』(Ambigua)、『神学と受肉の摂理とについて—タラシオスに宛てて—』(Capita Theologica et Oeconomica)、『愛についての400の断章』(400 Capita De Caritate)、そして『神秘への参入(奉神礼の奥義入門)』(Mystagogia)などの著作である。この研究では、それらに依拠しつつ、マクシモスの文脈全体から主として次のようなテーマを取り出

して吟味し、全体としての意味連関と問題の帰する中心的位相を見定めようとした。すなわち、

(i) 「自然・本性」(ピュシス)のダイナミズム—「在ること」への与りの多様性、および形相的限定から無限なる存在への道—

(ii) 「善く在ること」(アレテー、徳)の成立と、そこに関わる自由、悪、そして罪の問題—閉ざされた存在様式の突破、ロゴスの根拠への自由な応答・聴従—

(iii) 自然・本性の紐帯としての人間、自然のロゴス化、諸々の異なり・分裂の「愛による再統合、身体の聖化、全一的な交わり(エクレスシア)、そして典礼におけるコスモロジー的な顕現」

(iv) 受肉と神化(テオーシス)との関わり—信の成立における超越的根拠の現前、受肉の現在—

といったさまざまな、しかし根源を同じくする諸問題である。

## 4. 研究の成果

ここ7、8年の間に証聖者マクシモスについて10編余の論考を発表してきたが、平成20年度は、それらを吟味し直し敷衍して、一書にまとめるべく努めた。それが、前記の『人間と宇宙的神化』という書物である。その内容(主題と論点)として、各々の章の表題を示せば、次の通りである。

- 第1章 自然・本性の開かれた構造
- 第2章 「善く在ること」(アレテー)の成立をめぐって
- 第3章 人間的自由と善の問題
- 第4章 情念と自己変容—身体・質料の復権—
- 第5章 身体性の問題
- 第6章 人間本性の変容と開花への道—「神と人との協働」と「信」をめぐって—
- 第7章 異なり、分裂、そして再統合—他者の問題—
- 第8章 エクレスシアの諸相とその全一的かたち
- 第9章 受肉と神化の問題—神人的エネルギーと人間—

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(上記の拙著は、この7、8年のさまざまな論文が素地になっているので、その拙著の執筆に関連しているものを発表順に挙げておく。)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 谷 隆一郎, 「アレーの成立と神人的エネルギー—脱自的愛の根底—」(『エイコーン』, 第36号、2007年)
- ② 谷 隆一郎, 「<在ること>と<善く在ること>とのダイナミズム—脱自的経験から、その根拠へ—」(『哲学論文集』, 第43号, 九州大学哲学会, 2007年, 1-20頁)
- ③ 谷 隆一郎, 「神人的エネルギーと人間」(『エイコーン』, 第35号, 2007年, 18-39頁)
- ④ 谷 隆一郎, 「エクレスシアの諸相とその全一的かたち」(『エイコーン』, 第33号, 2006年, 2-28頁)
- ⑤ 谷 隆一郎, 「エイコーンとホモイオーシス」(『エイコーン』, 第32号, 2005年, 15-31頁)
- ⑥ 谷 隆一郎, 「人間と自然のダイナミズム」(『神秘の前に立つ人間—キリスト教東方の聖性を拓く—』所収, 新世社, 2005年, 137-184頁)
- ⑦ 谷 隆一郎, 「自然・本性の開花への道—証聖者マクシモスにおける神化の文脈をめぐって—」(『パトリスティカー教父研究—』, 新世社, 2005年, 38-63頁)
- ⑧ 谷 隆一郎, 「情念と自己変容」(『宗教と文化』所収, ノートルダム清心女子大学キリスト教研究所, 2005年, 43-70頁)

⑨ 谷 隆一郎, 「人間と神化の問題—証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって—」(『自然法と文化』所収, 創文社, 2004年, 269-355頁)

⑩ 谷 隆一郎, 「自然・本性の変容と身体性」(『エイコーン』, 第29号, 2004年, 2-22頁)

⑪ 谷 隆一郎, 「人とコスモロジー—証聖者マクシモスの意志論・序説—」(『エイコーン』, 第24号, 新世社, 2001年, 2-20頁)

(なお, 上の①, ③, ④, ⑤, ⑩, ⑪は査読あり。

②, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨は依頼論文)

[学会発表] (計 2 件)

① 谷 隆一郎, 「人間本性とその成就(救い)」, 九州大学哲学会大会シンポジウム, 九州大学, 2007年9月

② 谷 隆一郎, 「エイコーンをめぐって」, 東方キリスト教学会第5回大会シンポジウム, 2004年8月, 信州

[図書] (計 1 件)

① 谷 隆一郎, 『人間と宇宙的神化—証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって—』(知泉書館, 2009年2月, 360頁)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷 隆一郎 (TANI RYUICHIRO)  
九州大学・大学院人文科学研究院・教授  
研究者番号：60128048

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし